

# 中国語動詞重複分裂文と ROOT 移動

胡 亜敏

## 要 旨

中国語では、(1)に示すように動詞が重複して生起する動詞重複分裂文が見られる。

(1) [Topic 吃], 我是 [Focus 吃过], 不过…

Cheng & Vicente (2013)では、文頭の「吃」は主題で、動詞そのものが TopP の指定部に移動すると論じている。動詞移動分析では、移動する要素と元位置に残された要素は必ず対応するという性質を持つ一方で、副詞が文末に現れる場合、主題位置の動詞は、否定辞・アスペクトマーカ・副詞と共起できないことから、動詞性が失われた要素だと捉えられている(Tsao(1987))。本稿では、動詞重複分裂文において、文頭に現れる「動詞」の性質を明らかにした上で、ROOT 移動という新たなアプローチを提案し、動詞重複のメカニズムを検討する。具体的には、語根の $\sqrt{\text{ROOT}}$ 、あるいは $\sqrt{\text{RootP}}$ が移動し、主動詞は元位置に残され、アスペクトマーカとの併合によって発音されて重複が生じることを示す。この仮説を用いることで、文頭と文中の動詞の性質上のずれを説明することができる。また、中国語にも英語の“do support”あるいは日本語の「スル支持」のような操作が行われている可能性を予測する。

## キーワード

中国語 動詞重複 ROOT 移動 生成文法

### 1 はじめに

中国語では、(1)に示すように、動詞「吃」が重複し、後ろの「吃」にはアスペクトマーカの「过」と共起する動詞重複分裂文が見られる(以下、前の動詞を  $V_1$ 、後ろの動詞を  $V_2$  と呼ぶ。  $V_1=V_2$ )。

(1) [Topic 吃], 我 是 [Focus 吃过], 不过,...  
食べる 私 cop 食べ- exp しかし  
「私は食べることは食べたが…」

この構文において、Cheng (2008)は前の「吃」は主題だと主張しており、また、Cheng & Vicente(2013)は、動詞重複のメカニズムとして、動詞そのものが文頭の TopP の指定部に移動して生成されたものであると論じている。

胡(2017)では、Cheng & Vicente(2013)の動詞移動分析に基づいて、中国語の動詞重複分裂

文の派生は、V 及び VP を文頭に基底生成する、VP が直接文頭の位置に移動する、V が主語とコピュラ動詞「是」の間にある vP の主要部である v へ V 移動するという 3 つのパターンがあると主張している。しかしながら、このような重複が生じる際に、文頭に生起する V<sub>1</sub> はいったいどのような性質を持つかという問題には言及しなかった。

そこで、本稿は、まず、Tsao(1987)の分析を踏まえ、前に出現する動詞の性質を明らかにし、Cheng & Vicente(2013)の動詞移動分析の問題点を指摘する。そして、ROOT 移動仮説という新たなアプローチを提案し、動詞重複のメカニズムを再検討する。最後に、中国語にも *do-support* のような操作が行われていることを示唆する。

## 2 先行研究

Cheng & Vicente (2013)は、以下の 2 つの根拠に基づいて動詞重複分裂分では動詞そのものが移動すると主張している。

まず、動詞重複は「島の制約」(island constraint)に従わねばならない。

- (2) \*吃, [他 是 已经 吃了 以后], 我 才 回 到 家 不过...  
 食べる 彼 cop もう 食べ-perf 以後 私 そのときに 帰る 家 しかし...  
 「食べることは、彼がすでに食べた後で、私は家に帰ったが...」

(Cheng & Vicente2013 : 8 訳筆者)

(2)は、「付加詞制約」のため、付加詞の中から要素を取り出して移動することができないことを示している。

2 つ目の根拠は、文の中に現れる 2 つの動詞が同一でなければならないという事実である。

- (3) a. \*旅行, 我 是 [坐过] 飞机  
 旅行 私 cop 乗る-exp 飛行機  
 「旅行することに関して、私は飛行機に乗ったことがある。」

- b. \*煮菜, 我 是 [烤过] 鸡  
 料理を作る 私 cop 焼く-exp チキン  
 「料理を作ることにに関して、私はチキンを焼いたことがある。」

(Cheng & Vicente2013 : 9)

(3a)文頭の「旅行(旅行)」と(3b)文頭の「煮菜(料理)」はそれぞれ後ろの「坐」、「烤」と異なっているため、非文になる。Cheng & Vicente (2013)による動詞重複のメカニズムでは、動詞そのものが移動し、元位置に複製されたコピーが発音されるため、V<sub>1</sub> と V<sub>2</sub> は同一でなければならないと論じている。したがって、(3)のように、動詞が同一でないと、非文になってしまう。

以上の事実は、動詞重複分裂文における 2 つの動詞が移動によって生成されることを示

している。

Cheng & Vicente(2013)の分析に従うと、動詞移動の際には、移動する要素と元位置に残された要素は必ず対応するという性質を持たなければならない。しかしながら、Tsao(1987)では、(4)のような副詞が文末に現れる重複構文では、 $V_1$  と  $V_2$  は同じ形態に見えるが、 $V_1$  は動詞性が失われた要素であり、2つの動詞の性質が異なると論じている。

- (4) [Topic 他] [Topic 看书] 看了 五个小时。  
 彼 読む 本 読む perf 五時間

「彼は本を 5 時間読んでいた。」

(Tsao1987: 17)

次節では、Tsao(1987)の観察を概観し、動詞重複分裂文の  $V_1$  の性質を明らかにすることで、Cheng & Vicente(2013)の問題点を示す。

### 3 $V_1$ の性質

前節では、Cheng&Vicente(2013)の動詞移動分析を提示し、そのうえで  $V_1$  と  $V_2$  の性質が異なる可能性を示した。本節では、Tsao(1987)の分析を踏まえ、Cheng&Vicente(2013)の問題点を指摘する。

#### 3.1 Tsao(1987)

本稿で扱っている動詞重複分裂文以外に、中国語には別の動詞重複構文が存在する。それは、(5)のように、 $V_1$  が文頭ではなく、主語の後ろに現れ、文末に副詞的要素が出現する構文形式である<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 動詞重複構文と共起する副詞は 4 つのタイプに限られている(Li and Thompson(1981)) :

##### i. Quantity adverbial phrase

- (1) a. \*我 拍 了 手 两次。  
 私 拍 PERF 手 二回  
 b. 我 拍手 拍 了 两次。  
 私 拍手 拍 PREF 二回  
 「私は 2 回拍手した。」

##### ii. Complex stative construction

- (2) a. \*我们 打 篮球 得 都 累 了。  
 私たち 打つ バスケットボール DE も 疲れる PREF  
 b. 我们 打 篮球 打 得 都 累 了。  
 私たち 打つ バスケットボール 打つ DE も 疲れる PREF  
 「私たちはバスケットボールをして疲れた。」

- (5) [Topic 他] [Topic 看 书] 看 了 五个小时。 ((4)再掲)  
 彼 読む 本 読む perf 五時間  
 「彼は本を 5 時間読んでいた。」

Tsao(1987)は(5)の主語「他」は 1 次的主題であり、「V<sub>1</sub>+目的語」の連鎖「看书(本を読む)」は 2 次的主題であると指摘している。さらに、前の動詞 V<sub>1</sub>は脱動詞化(deverbalization)が行われており、動詞としての特性が失われていると論じている。

この主張の妥当性を検証するために、Tsao は以下の 3 つの統語的特徴を挙げている。

①. アスペクトマーカ―「了」「过」と共起できない

- (6) a. 他 看 书 看 了 五个小时。  
 彼 読む 本 読む perf 五時間  
 「彼は本を 5 時間読んでいた。」  
 b. \*他 看了 书 看了 五个小时。  
 彼 読む-perf 本 読む-perf 五時間  
 c. \*他 看了 书 看 五个小时  
 彼 読む-perf 本 読む 五時間

- (7) a. 他 照 相 照 过 两次。  
 彼 撮る 写真 撮る exp 二回  
 「彼は写真を 2 回撮ったことがある。」  
 b. \*他 照过 相 照过 两次。  
 彼 撮る-exp 写真 撮る-exp 二回

iii. Locative phrase

- (3) a. \*爸爸 挂 帽子 在 衣架 上。  
 お父さん かける 帽子 に ハンガー 上  
 b. 爸爸 挂 帽子 挂 在 衣架 上。  
 お父さん かける 帽子 かける に ハンガー 上  
 「お父さんは帽子をハンガーにかけた。」

iv. Directional phrase

- (4) a. \*我们 跑步 到 学校 了。  
 私たち 走る 着く 学校 PREF  
 b. 我们 跑步 跑 到 学校 了。  
 私たち 走る 走る 着く 学校 PREF  
 「私たちは走って学校に行った。」

- c. \*他 照过 相 照 两次。  
彼 撮る-exp 写真 撮る 二回

(Tsao1987: 17)

(6)(7)が示しているように、V<sub>2</sub>の「看」「照」にアスペクトマーカ―が生起するか否かにもかかわらず、V<sub>1</sub>にアスペクトマーカ―「了」「过」を付けると非文になる。

②. V<sub>1</sub>に否定辞が付けられない。

- (8) a. 他 上个月 打 球 打 了 三次。

彼 先月 打つ ボール 打つ perf 三回

「彼は先月ボールのプレイを3回した。」

- b. 他 上个月 打 球 没 打 三次。

彼 先月 打つ ボール ない 打つ 三回

「彼は先月ボールのプレイを3回しなかった。」

- c. \*他 上个月 没 打 球 打 三次。

彼 先月 ない 打つ ボール 打つ 三回

- (9) a. 妈妈 挂 衣服 挂 在 衣架 上。

お母さん かける 洋服 かける に ハンガー 上

「お母さんは洋服をハンガーにかける。」

- b. 妈妈 挂 衣服 不 挂 在 衣架 上。

お母さん かける 洋服 ない かける に ハンガー 上

「お母さんは洋服をハンガーにかけない。」

- c. \*妈妈 不 挂 衣服 挂 在 衣架 上。

お母さん ない かける 洋服 かける に ハンガー 上

(Tsao1987: 19)

否定を表す形態素「没」や「不」もV<sub>2</sub>にしか共起できない。

③ 単音節の副詞がV<sub>1</sub>の前に生起できない。

- (10) a. 他 念 书 只 念 了 三年。

彼 勉強する 本 だけ 勉強する perf 三年

「彼は3年しか勉強しなかった。」

- b. \*他 只 念 书 念 了 三年。

彼 だけ 勉強する 本 勉強する perf 三年

- (11) a. 他 唱 歌 还 唱 得 不 错。  
 彼 歌う 歌 程よい 歌う de ない 悪い  
 「彼が歌を歌うのは悪くない。」
- b. \*他 还 唱 歌 唱 得 不 错。  
 彼 程よい 歌う 歌 歌う de ない 悪い

(Tsao1987: 20)

(10)(11)では、「只」<sup>2</sup>「还」のような副詞は V<sub>1</sub> と共起できないことを示している。

以上 3 つの統語的な性質を通して、Tsao(1987)は V<sub>1</sub> が動詞性を失った要素であるという分析が裏付けられるとしている。

### 3.2 動詞重複分裂文における V<sub>1</sub> の性質

Tsao(1987)の分析が本稿で取り上げている動詞重複分裂文にも当てはまることを、同様の観察を用いて示す。

①V<sub>1</sub> はアスペクトマーカ―「了」「过」と共起できない。

- (12) a. 吃, 我 是 吃 过, 不过…  
 食べる 私 cop 食べる-exp しかし  
 「食べることにに関して、私は食べたが…」
- b. \*吃 过, 我 是 吃 过, 不过…  
 食べる-exp 私 cop 食べる-exp しかし
- c. \*吃 过, 我 是 吃, 不过…  
 食べる-exp 私 cop 食べ しかし

②V<sub>1</sub> に否定辞が付けられない

- (13) a. 吃, 我 是 没 吃。  
 食べる 私 cop ない 食べる  
 「食べることにに関して、私は食べていない。」
- b. \*没 吃, 我 是 没 吃。  
 ない 食べる 私 cop ない 食べる

<sup>2</sup> ここでの「只」を「だけ」と訳しているが、日本語のとりたて詞の「だけ」の性質とは異なる。中国語において、「只」は必ず動詞の前に生起する副詞である。例えば日本語の「ご飯だけを食べた」を中国語に訳す際に、「我只吃了饭」というように「だけ」が動詞の前に来る形式になる(i)。

i. 我 只 吃 了 饭  
 私 だけ 食べる perf ご飯  
 「私はご飯だけを食べた。」

- c. \*没 吃, 我 是 吃。  
ない 食べる 私 cop 食べる

③単音節の副詞が V<sub>1</sub> と共起できない

- (14) a. 吃, 我 是 只 吃 饭。  
食べる 私 cop だけ 食べる ご飯  
「食べることに関しては、私はご飯だけ食べるが…」  
b. \*只 吃, 我 是 吃 饭。  
だけ 食べる 私 cop 食べる ご飯  
c. \*只 吃, 我 是 只 吃 饭。  
だけ 食べる 私 cop だけ 食べる ご飯

(12)~(14)で示したように、動詞重複分裂文においても、V<sub>1</sub>は動詞性が失われた要素だと考えられる。すなわち、動詞重複分裂文における V<sub>1</sub>は名詞化された要素だと言える。

また、中国語だけではなく、日本語にも動詞が文頭に生起する現象が見られる。しかし、日本語の場合は動詞が文頭の主題位置に現れる際に、「こと」「の」などのマーカーによって名詞化される。

- (15) 食べる こと/の は食べたが…

一方で、中国語では「こと」「の」のようなマーカーは存在しないため、主題位置の「動詞」は見た目では動詞として現れているものの、実際は形式が変化しないまま名詞化されていると考えられる。

この分析が正しければ、Cheng&Vicente(2013)が用いる動詞移動分析は適用できなくなる。それは、動詞そのものが移動するのであれば、V<sub>1</sub>と V<sub>2</sub>の性質上のずれは説明できなくなる。

故に、本稿では Cheng&Vicente(2013)、胡(2017)の動詞移動分析を廃棄し、ROOT 移動仮説を導入することによって、動詞移動のメカニズムを捉え直す。次節では具体的な分析方法を提示する。

#### 4 ROOT 移動仮説

前節の分析をまとめると、動詞重複分裂文において、V<sub>1</sub>は動詞として移動しているとは言えない。一方で、2節で示した Cheng & Vicente (2013)の分析から、2つの「動詞」の間には島の制約及び同一性制約が見られるため、移動が生じていることは否定できず、基底生成の可能性は排除される。

以上の理由から、動詞重複分裂文の派生は確実に移動に関わるが、動詞そのものが移動

するのではなく、別の要素が移動していると考えなければならない。この問題を解決するために、本稿では、分散形態論(Distributed Morphology)の観点から新たな動詞重複メカニズムを提案する。

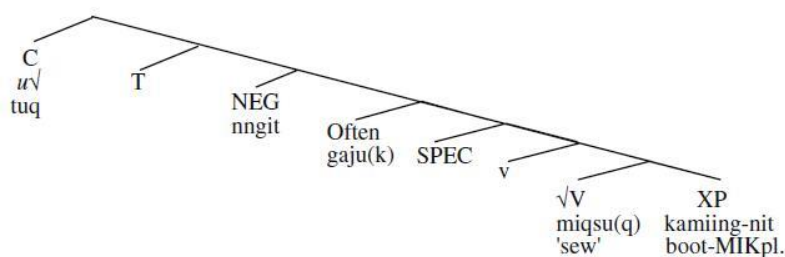
Koenig&Davis(2001)は、動詞は 2 つの部分から構成されており、1 つは little v で、否定接辞、アスペクトなどに修飾されることが可能であるのに対して、もう 1 つは項構造を持つ ROOT であることを指摘している。

Johns(2007)では、ROOT 移動分析を用いて、イヌクティット語(Inuktitut)における制限的名詞複合語(Restricting noun incorporation)現象を説明している。具体的には、(16a-b)のように、探査子(Probe)は一種のムードとして C の位置を埋めており、u√素性を持つ Probe が何らかの√ROOT を探しているため、「√miqsu」が自動的に C に移動するという分析である。

(16) a.

miqsu-gaju-nngit-tuq	kamiing-nit
<i>sew-often-neg.-part.3s</i>	<i>boot-MIKpl.</i>
She hardly ever sews boots.	

b.



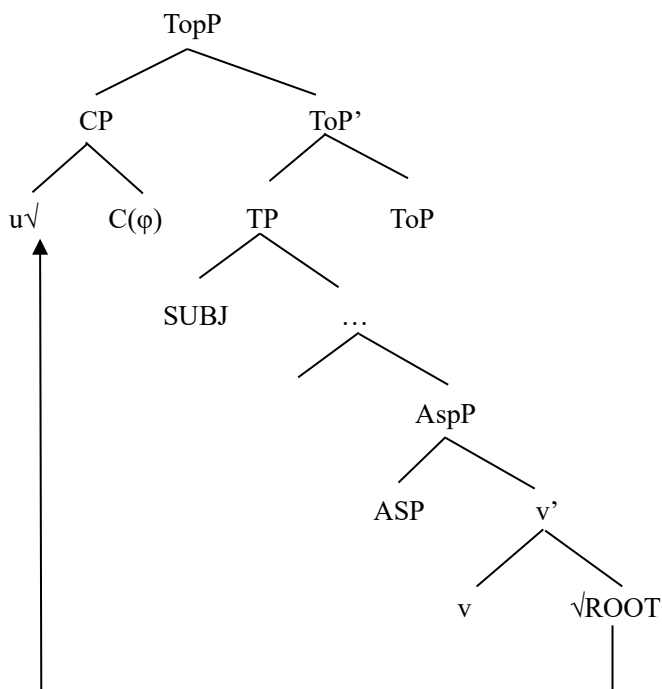
本稿は Koenig&Davis(2001)と Johns(2007)の考え方にに基づき、中国語の動詞重複構文にもムードが存在すると仮定し、ROOT 移動によって動詞重複分裂文が生成されることを提案する。

(17)の構文の派生を(18)のように分析する。

(17)	[ <u>Topic</u> 吃],	我 是	[ <u>Focus</u> 吃 过],	不过,...	((1)再掲)
	食べる	私 cop	食べ-exp	しかし	
	「私は食べることは食べたが...」				



(18)



(18)は、C の位置に日本語の「こと/の」のように目に見えない名詞性を持つ補文化辞が埋め込まれており、ムードの Probe(u√)の要求でカテゴリーが決まっていない√ROOT が文頭に移動した後に、C によって名詞化されることを示している。v'の下に残された意味を持たない little v はアスペクトマーカをサポートするために、発音しなければならない。したがって、動詞重複現象が起こると考えられる。

このような派生を仮定すると文頭の動詞はなぜ名詞性を持つのか、すなわち V<sub>1</sub> と V<sub>2</sub> の性質上のずれが説明できる。

また、単独の動詞だけではなく、(19a)のように目的語を伴って主題位置に生起する場合が存在する。ただし、この場合は後ろの V<sub>2</sub> に目的語が出現しない(19b)。

- (19) a. [Topic 吃 饭], 我 是 吃过 了, 不过  
 食べる ご飯 私 cop 食べる-exp perf しかし  
 「ご飯を食べることに関して、私は食べたが…」
- b. \* [Topic 吃 饭], 我 是 吃 过 饭 了, 不过……  
 食べる ご飯 私 cop 食べる-exp ご飯 perf しかし  
 「ご飯を食べることに関して、私はご飯を食べたが…」

V<sub>2</sub> に目的語に付けられない事実から、中国語の動詞重複分裂文において、V<sub>2</sub> は項構造を持たない little v だという分析に裏付けられる。

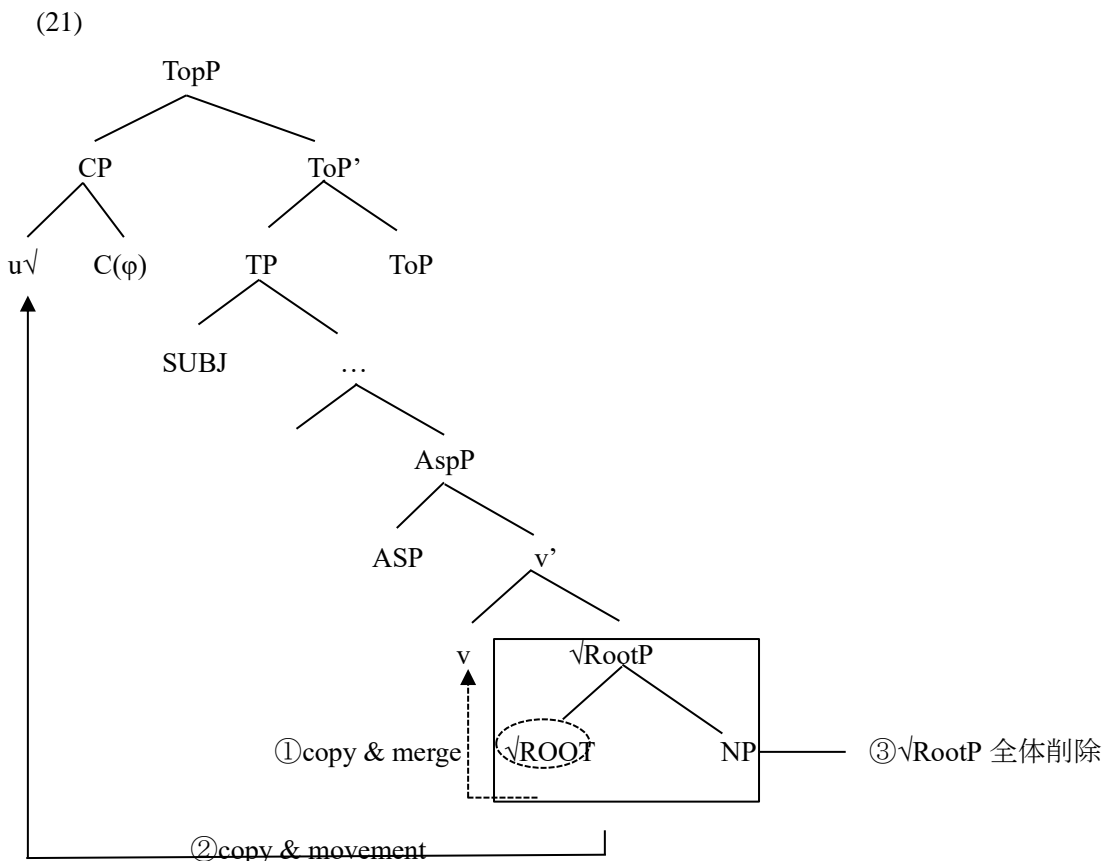
また、(19a)は、V<sub>1</sub>の後ろに目的語が出現するため、V<sub>1</sub>が動詞であることを示しているように見えるが、ここでの「飯(ご飯)」は特定の指示性を持たず、「吃饭(ご飯を食べる)」全体で「食事する」というイベント名詞句と見なされる。

さらに、V<sub>1</sub>の目的語位置には、(20)のように指示的代名詞、数量詞が出現できない。これは、V<sub>1</sub>が動詞性を失い、名詞性を持つという分析を支持すると考えられる。

- (20) a.\*吃 这 碗 饭 , 我 是 吃 了。  
 食べる この 杯 ご飯 私 cop 食べる perf  
 「この杯のご飯を食べるに関して、私は食べたが…」
- b.\*看 一 本 书 , 我 是 看 了。  
 読む 一冊 本 私 cop 読む perf  
 「1冊の本を読むに関して、私は読んだが…」

(20a)の「这」や(20b)の「一本」のように指示的代名詞と数量詞が目的語と共起すると容認できなくなる。

以上の分析に従うと、(19a)の派生は(21)のようになる。文頭に目的語を生起する場合、√ROOT 移動ではなく、√RootP という句を仮定し、√RootP 全体が移動すると考える。



(21)が示しているのは、まず、 $\sqrt{\text{ROOT}}$  がコピーを残して  $v$  に移動して併合し(①)、 $\sqrt{\text{RootP}}$  全体が CP の指定部に移動して C によって名詞化される(②)。最後に、元位置に残された  $\sqrt{\text{RootP}}$  が削除される(③)。

## 5 「スル支持(do-support)」が生じる可能性

本節は、前節の分析に基づいて、中国語にも英語の“do support”あるいは日本語の「スル支持」のような操作が行われている可能性を示したい。

まず、日本語においても、以下のように動詞重複現象が見られる。

(22) 食べる こと/の は食べたが… ((15)再掲)

また、取り立て詞を入れて(22)と全く同じ意味を表す構文も存在する。

(23) a. 食べは [Fした] が…

b.\*食べは食べたが…

(23)では、日本語は取り立て詞の介在によって動詞の重複が制限されることを示している。一方で、(22)の構文は中国語動詞重複分裂文と並行的に見えるが、 $\text{ROOT}$  移動分析が適用されない。それは、文頭の「食べる」は「こと/の」によって名詞化される前にすでに時制の「る」を含んでおり、(24)のように過去の「た」も文頭位置に生起できるので、 $\sqrt{\text{ROOT}}$  として移動しているとは考えられないためである。

(24) 食べた こと/の は食べたが…

それに対して、(23a)では語根の「食べ」が $\sqrt{\text{ROOT}}$  のままで移動することが可能になる。

そして、前節では、動詞を「 $\sqrt{\text{ROOT}}$ 」と「little  $v$ 」に分け、「 $\sqrt{\text{ROOT}}$ 」は項構造を持ち、little  $v$  は修飾要素と共起できることを示した(Koening&Davis(2001))。この分析を踏まえて、意味上から考えてみると、中国語の(25)の文においては、後ろの「吃」は「食べる」という意味を含意しない一方で、前の「吃」は「「食べること」は確実に「した」という意味を表している。

(25) [Topic 吃], 我是 [Focus 吃过], 不过,... ((1)再掲)  
 食べる 私 cop 食べ-exp しかし  
 「私は食べることは食べたが…」

さらに、中国語の場合、残された√ROOT のコピーが文頭に移動した√ROOT と同一連鎖の中にあるため、削除されるはずだが、実際には削除すると非文になる。

- (26) \*吃,        我    是    过,    不过…  
          食べる   私    cop   exp   しかし

Cheng & Vicente(2013)では、(25)の [「吃」+「过」] の連鎖が命題内容は真実だということを陳述する Verum Focus として解釈しており、「过」は空の焦点主要部と見なしている。また、胡(2017)は Cheng & Vicente(2013)の説明に基づき、「过」を AspP の主要部と仮定し、V がコピーを残して文頭に移動し、残されたコピーが Asp へ移動することによって削除操作の適用を回避するというメカニズムを主張している。

この 2 つの分析は、いずれにしても、動詞「吃」が「过」と形態的に融合しなければならぬことを示している。その理由として、「过」は日本語の「た」のように単独では出現できない拘束形態素のため、何らかの要素を用いて発音上に支える必要があるということである。この点から見ると、中国語にも英語の“do support”あるいは日本語の「スル支持」と似たような操作が行われていることが推測される。

しかしながら、この問題に対する do-support 分析はまだ不完全であり、理論的な説明は十分ではないため、今後の課題にしたい。

## 6 まとめ

本稿は、Tsao(1987)の分析を踏まえて、中国語動詞重複分裂文における V<sub>1</sub> は動詞性が失われた要素であり、名詞性を持つことを示したうえで、Cheng & Vicente (2013)の動詞移動分析の問題点を指摘した。この問題を解決するために、Koenig&Davis(2001)および Johns(2007)の分析に基づき、ROOT 移動仮説を新たな動詞重複のメカニズムとして提案した。これは、V<sub>1</sub> 単独で文頭に現れる場合は√ROOT が移動し、目的語が伴う場合は√RootP 全体が移動するという分析である。単独で移動した√ROOT と全体で移動した√RootP はいずれも C によって名詞化されることで、V<sub>1</sub> と V<sub>2</sub> に性質の違いがあることを主張した。そして、日本語との対照に基づいて、理論的にまだ解決すべき問題が残っているものの、中国語にも do-support (スル支持)操作が行われている可能性を示した。

## 参考文献

- Cheng, Lisa L.-S (2008)Deconstructing the *shi...de* construction. *The Linguistic Review* 25: 235-266.  
 Cheng, Lisa L-S. and Luis Vicente (2013)Verb doubling in Mandarin Chinese. *Journal of East Asian Linguistics* 22: 1-37.  
 Huang, C.-T. James, Audrey, Y.-H. Li, and Yafei Li (2009)*The Syntax of Chinese*. Cambridge

University Press.

Johns, Alana (2007) Restricting noun incorporation: root movement. *Natural Language & Linguistic Theory* 25:535-576

Koenig, J.-P. and Davis A. (2001) Sublexical modality and the structure of lexical semantic representations. *Linguistics and Philosophy*, 24(1), 71–124.

Kubo, Miori (1992) *Japanese Syntactic Structures and Their Constructional Meanings*, Ph.D. dissertation, MIT.

Tsao, Feng-Fu (1987) On the so-called ‘verb-copying’ construction in Chinese. *Journal of Chinese Language Teachers Association* 22: 13–44.

胡亜敏 (2017) 「動詞重複構文」同志社大学修士学位論文.  
(胡亜敏 筑波大学大学院生)

# Verb copying cleft construction in Mandarin Chinese and the ROOT movement

HU Yamin

The aim of this paper is point out a new derivation mechanism of verb copying cleft construction in Mandarin Chinese. Unlike current researches, I consider that the two same verbs which appear in a sentence are not generate by verb movement. Because they have different properties. In this case, the first verb has been nominalized. For the second verb, which is at the original location, it must be a verb. For this purpose, I assume that a  $\sqrt{\text{ROOT}}$  can be moved to topic position before given a syntactic category, with its argument structure. The little  $v$  lefted behind can be modified by semantic operations like negation, aspect and adverb. While it avoids deletion operation because morphological fusion of aspect *guo/le*. From this perspective, I suggest an operation such as "do support" in English or "suru support" in Japanese might be used in Mandarin Chinese.